

# アフリカの人々と名付け 15

## 貶む名前と、誇る名前

小馬 徹

### 貶む名前と、誇る名前

これまで何回かの連載で取り上げたモシやキプシギスの「詩名」、あるいはキプシギス、ディンカ、ヌエルの「牛名」は、肯定的な価値を表現するという点で、アフリカの名前ではむしろ珍しい属性をもっていると言ってよいだろう。

### 否定的な経験を記念する名前

アメリカの文化人類学者バイデルマンは、タンザニアに住むバントゥ語系の母系農耕民であるカグル人の名前を、次のように評している。「カグルの伝統的な名前の由来について言えば、単純な型などはないが、幾つかの傾向は見られる。(中略)我々自身の社会と比べて何よりも驚くのは、大多数の名前が否定的な性質や経験に結び付けられている事である」[ Beidelman, T.O., "Kaguru Names and Naming", *The Unanda Journal*, 30, 1974]。確かに、彼が挙げている数十の名前には、子供が紛争時に生まれたとか、出生の正当性に疑義があるなどという意味の名前が数多く含まれている。

こうした傾向は、ザイールのテンボ人、ウガンダのニョロ人、ウガンダとザイールの国境地帯に住むルグバラ人などの農耕民に共通のものであった。そして、その一つの極点として、生まれた子供の遠からぬ死を予知する「叙死名」が存在した。これに反して、スーダンのディンカやヌエル、ケニアのキプシギス、ナンディ、テリックなど、ナイル語系の牧畜民の諸社会では、このような屈折した名

付けは、一般には行われていない。

### キプシギスの渾名

しかしながら、渾名となれば、事情はやや異なる—ここでは、ある人物の姿形、容貌、器量、癖、振る舞いなどに因んで付けられた実名以外の名前を、渾名と考えよう。勿論、渾名には揶揄や嘲りの気持ちを含むものもある。しかし、親愛の情を示す愛称もそれに劣らず多い。日本では、むしろ後者が主流を占めているだろう。

ところが、キプシギスでは、価値中立的に相手の特徴を叙述する渾名はあっても、肯定的な価値を帯びた渾名はほとんど存在しない。次に、その例を幾つか挙げてみよう。

「おしゃべり」、「目線が〔上背を〕通り越す男」(チビ)、「耳朶に穴をあけない男」(伝統への反逆者)、「指差し」(人や家畜を指差せば、人々は激怒する)、「六本指」、「ウサギ」(三つ口)、「禿げ頭」、「出っ歯」、「出臍」、「女」(泣きむし／妻を虐待する男)、「あばた面」、「四つ目」(眼鏡をかけた男)、「藪睨み」、「足悪」、「大食らい」、「目玉グリグリ」、「女たらし」、「ごくつぶし」。

殊更辛辣な例はないとしても、日本であれば、相手の面前では決して口に出せない種類の渾名である。しかし、キプシギスでは、人々は往々否定的な含意をもつ渾名で知られる事になり、そうである限りは本人の眼前でも憚る事なく渾名が使われるのである。本人も決して感情を害したりはしない。

## 負の名前を嘉する

では、このようなキプシギスの渾名のあり方の背景にある論理や信条は一体どのようなものであろうか。それは、「おしゃべり」という渾名に纏わる事情から窺うことが出来る。

キプシギスの挨拶では、「はい、元気（無事）です」に当たるのが、「言葉はない」である——なお、東アフリカの共通語であるスワヒリ語にも、同様の表現がある。「言葉」の語には、「あえて言わざるを得ない（よくない）事」というニュアンスがある。

キプシギスでは、言葉はそれ自体が人間の意図を超えた独自の論理をもって働く神秘的な力であると考えられている。また、不必要な言葉は不必要な反応を招来する。その濫用は恐れ忌まれており、だから口数の多い人は強く敬遠され、嫌われるのである。

自分の、或いは他人の子供や妻、或いは牛などの家畜や畑作物を褒める事は、祝福ではなく呪いであると考えられて来た。また、病人に回復を請け合う事も同様だ。そのような事が口に出されれば、必ず累が及び、不幸が招来されると観念されるのである。

キプシギスでも、兄弟が相次いで夭逝した後に生まれた子供にだけは、「穴の子」、「道の子」、「土豚」など、特殊な名前を与えた。また、その子供を「ハイエナ」とか「犬」、あるいは「人ならず」と呼んで、あたかも存在しないように扱った。不幸が重なった場合に限定されてはいるが、この慣行には、上と同様の心理を確認出来るだろう。

既に明らかなように、キプシギスでは、命名次元では他称である渾名は、相手に災いをもたらす事のないように、否定的な側面を叙述するものが望ましいのである。そして、親が子供に与える名前も美しいものではなく、誕生の状況を価値中立的に叙述している。

## 奴隷には良い名を

西アフリカの広い地域に住んでいるフルベ人の間には、奴隷制度がまだ残っている。そ

して、「近頃は、たとえ奴隷の身分であろうとも自由人の名前つけるが、以前は、奴隷には奴隷用の名前をつけた」〔江淵一久「西アフリカ・フルベ族の名づけ」、『月刊言語』19(3)、1990〕。

ここで興味深いのは、「讚美」、「祭り」、「富」など、「男奴隷の名前には、いわば、おめでたいものが少なくない」事である。〔江淵、前掲書〕。それは、決して彼らが尊重されているからではない。逆に、財産の一部として、人間以下の扱いを受けているがゆえだと考えられるのである。

## 自らを誇る名付け

カグル人も、子供や財産を自慢する事は祖霊や妖術師・邪術師の嫉妬を呼び、その喪失に繋がると考えている。だから、「自分の名前を自慢する人は、招き兼ねない危険を実際に回避するために、強くあらねばならない」のだ〔Beidelman, 前掲書〕。そして、それは世間一般の常識を超えた人物である。

こう考えれば、誇らかな詩名の類は——奴隷のものでない限り——自ら名乗る自称である可能性が高い。モシの「戦名」がそうであった。或いは、男性の凶暴なまでの雄々しさに優先的な価値を置く社会であれば、誇らかな詩名が他称でもあり得よう。例えばかつてのキプシギスのように、強力な軍団を誇り、他民族から家畜を略奪する慣行を経済構造にしっかり組み込んだ社会がその例である。

しかしながら、命名次元では、誇らかな詩名がモシでは自称であるのに反して、キプシギスでは他称である。この事実は、やはり重要だ。それは、既に考察した通り、モシが王制社会であり、他方キプシギスが平等制社会であるあからに他ならない。モシでは、破壊性を秘めた男性の雄々しさは自称としての詩名の中で何処までも誇示され、キプシギスでは詩名を他称に止める事で巧みに中和されているのである。

（こんま とおる 神奈川大学社会人類学）